みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Some Observations on the Japanese Kimono as Working Clothes

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西村, 綏子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004517

国立民族学博物館所蔵の労働衣服
——国内収集の上半衣について——

西　村　綏　子*

Some Observations on the Japanese *Kimono* as Working-Clothes

Yasuko NISHIMURA

Generally, a *kimono* is composed of many pieces of small cloth cut in a straight line from a piece of cloth about 5 m long. Frequently, worn-out cotton cloth is utilized. The relationship between cutting pattern and work for which the *kimono* is used is discussed here.

Ⅰ. 分析の視点
Ⅱ. 標本資料の分析例
Ⅲ. まとめ

Ⅰ. 分析の視点

この報告は国立民族学博物館所蔵の国内資料のうち労働衣服（とくに農村作業着）を分析したものである。

我が国で19世紀の後半以降農山漁村地帯で着用されていたいわゆる仕事着は，被服構成上，一部式と二部式とに類別され，二部式は上半衣と下半衣にわけられている。ここでは1979年度に分析した標本資料のうちから上半衣5例を選びその結果を以下のようにまとめることにした。

分析にあたっては各標本資料ごとに形状，材料，裁ち方，縫い方を観察し，寸法等を記録し，これらの資料が過去の人々の生活の生きた文化遺産である点を重視し，その被服学的観点から分析をすすめた。

* 岡山大学教育学部，本館共同研究員

また分析にあたってとくに次の点に留意した。

a　形　状

身頃，袖，衿，衽などの衣服の各構成要素の形態的特徴。縮尺1/10の見取図をつくり写真撮影や寸法の測定をおこなった。

b　材　料

素材，糸密度，組織，厚さ，織り方，色，柄

c　裁ち方，縫い方

各部分の布の裁ち方から用布の推定をおこない，裁ち方図を作製した。

縫い方では各縫合部の縫い方，始末の方法等。この報告ではこの項に力点をおいた。

なお，これまで農村作業着の調査収集については若干の経験はあったものの，今次のように作業着そのものについての詳細な観察をおこなう機会をもたなかったが，今回の研究によって改めてその重要性を知ることができた。

Ⅱ．標本資料の分析例

例1　[品名] コダナシ　[標本番号] H22890（衣類 F-3-5）

コダナシは腰までしかない筒袖の農用作業着で，タナシの短いものというところからこの呼び名があるらしく，それは鹿児島県の東半分，島根県八束郡で確認されている [柳田　1939: 28-29]。この標本資料も島根県下で採集されているところから八束郡辺りで着用されたものであろう。振りがあるところからそれは女性用であったと思われる。

a　形　状

この資料は身頃に衽がなく，衿が裾までついている。衿は前身頃の衿付け線から衿幅だけ付け出されて，裾まで付いている。この形式を仮りに本衿と称しておこう。身八つ口はちいさく (11 cm)，馬乗りはなく，袖は巻き袖で振りがあり，仕立ては単仕立となっている。各部分の寸法は別にあげたとおりである（表1）。

b　材　料

素材はアサにみえるが，島根県八束地方ではコダナシに藤布を用い，それは織目細かく紺に染めて着たといわれているので [柳田　1939: 39]，あるいは藤布であろうか。いずれにせよが織糸が比較的太いため糸密度も粗で，およそ経 [12本/1 cm]，緯 [7本/1 cm] である。全体としていわゆるぼってりした外観で，色は新品当時は紺無地

と推測され，現状ではかなり着古されていて浅黄に似，しらけた感じがつよくでている。

c　裁ち方と縫い方

この資料は単仕立であるからその用布の裁ち方は表布では附図 1–1 c のように推定される。布幅が 33 cm の寸法に織られていることは注目すべきことであり，この図でみる限り総用布丈は 550 cm となり，ほぼ半反でできあがったものと思われる。

背縫いは 1 cm の縫い代で白麻糸 2 本が用いられ，およそ [4.5目/3 cm] の縫い目で一度縫いとなっている。折りは左後身頃にかけてある。

脇縫いは 3 cm の縫い代でやはり白麻糸 2 本がつかわれ，背縫いとほぼ同じような縫い方がなされている。折りは前身頃にかけてあり，縫い代の始末はいずれもみられず，身八つ口止りと両袖付け止りの3カ所には白麻糸2本で単に引っかけるだけの閂止めがしてある。

身八つ口では 3 cm の折り代で，耳のまま脇の縫い代から続いて折られ，始末はしていない。

裾は 1.2 cm 幅の三つ折りが（裏でなく）表に出してあり，白麻糸 2 本でまつり縫いしている。まつりの縫い目の長さは約 0.3 cm，その間隔は約 1 cm となっている。

附図 1–1 b で明らかなように，肩の左右両側には表布に類似した麻布の小片（丈 14 cm，幅 19 cm）がつけられている。肩当ての三方は紺麻糸 1 本で縫い付けられている。

衿は並幅を半幅に裁って用いられているため，衿肩明き中央で接ぎ合されている。接ぎ目は片返しになっていて白麻糸で伏せ縫いがなされている。衿先きに折りきせは無く，衿ぐけは本ぐけにはなっているものの，指がはいるほどのおおきなくけ目となっている。

袖口はよく観察すると耳のまま用いられているが，コダナシにするまえにすでに何等かの衣服としてつかわれていたらしく，1 cm 幅ほどの三つ折りをした痕跡がかすかにうかがえる。

袖付けの縫い代は 3 cm であるが，身頃は折り付けにはせず，縫い代の始末もなされていない。

巻き袖の接ぎには紺麻糸を 2 本糸として用い，その縫い代はまつり付けである。振りは白麻糸 1 本で，裁ち目も耳もそのまま伏せ縫いとなっている。

例 2　[品名] 仕事着　[標本番号] H23175（衣類 F-3-7）

この資料の採集地は千葉県下で，採集当時の記録によれば呼称はウデヌキとなっている。

a　形　状

形のうえの特徴としては身頃に衽がなく，脇や裾に馬乗りがみられる。衿は裾までついている本衿で，掛け衿がかけてある。袖は細袖で袖付け側に襠がつき，袖口には明きがあり，そして長い紐が付けられている。

仕立ては肩当てがついた単仕立てで，各部分の寸法は別にあげたとおりである（表1）。

b　材　料

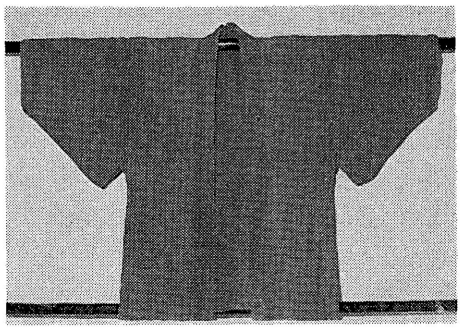
素材は紺木綿の平織でその糸密度は経［11本/1 cm］，緯［10本/1 cm］ほどで新品と思われる。肩当てはもともと男児用一つ身に用いた捺染柄金巾木綿の残り布だったものを利用したのではないかと想像される。肩当ての用布からこの資料は男子が着用するものだったと思われる。

c　裁ち方と縫い方

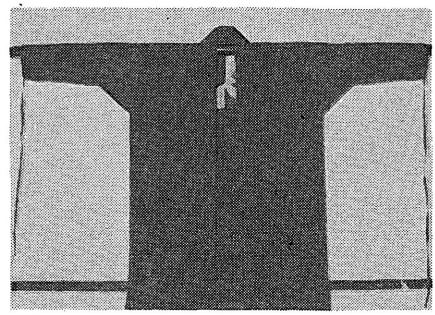
この資料もまた単仕立てであるから，用布の裁ち方は表布のみをみれば附図2-その

表1　標本資料の寸法表　　単位 cm

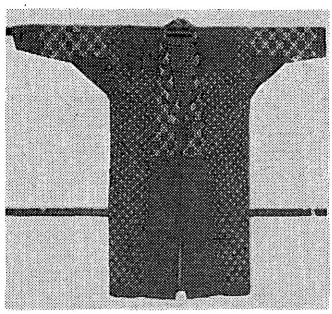
項目＼資料名	例1 コダナシ (H22890)	例2 仕事着 (H23175)	例3 鉄砲袖 (H24618)	例4 ミヂカハンテン (H16549)	例5 シバン (H17041)
1 身丈	75.5	82.5	104.7	79.0	87.0
2 ゆき丈	59.0	64.0	65.5	62.5	63.5
3 肩幅	30.0	31.0	28.5	32.5	32.0
4 袖幅	29.0	33.0	37.0	30.0	31.5
5 袖口	20.5	12.3	10.0	23.5	13.0
6 袖丈	41.3	22.2	29.5	26.5	44.0
7 袖付け	29.8	22.2	29.5	22.0	44.0
身八つ口	11.0	—	—	4.5	—
衽下り	—	—	12.0	—	—
衿下	—	—	50.0	37.0	32.5
合棲幅	—	—	13.0	—	—
衽幅	—	—	13.5	—	—
前幅	25.0	24.0	21.0	29.5	28.0
抱幅	22.0	—	—	—	—
後幅	29.0	29.5	25.5	31.0	32.0
衿肩明き	9.2	9.0	7.5	10.0	9.0
衿幅上	5.5	5.5	4.5	5.5	5.0
〃下	6.0	5.5	4.5	5.5	5.0
馬乗り	—	9.0	—	17.0	—
袖べり	—	—	—	—	1.0
紐の長さ	—	72.5		12.3	20.0
紐の幅	—	0.8		1.0	1.0



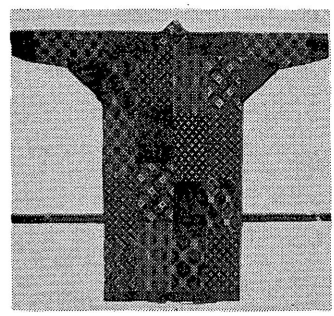
a　コダナシの表（前）



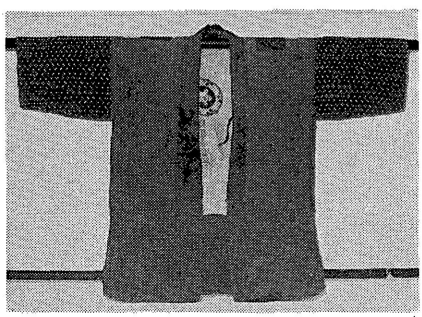
b　仕事着の表（前）



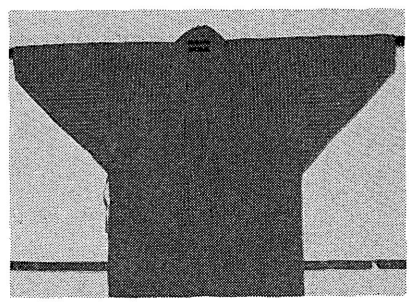
c1　木綿鉄砲袖接ぎ身頃継衣の表（後）



c2　木綿鉄砲袖接ぎ身頃継衣の表（前）



d　ミヂカハンテンの表（前）



e　シバンの表（前）

写真　本文所収の標本資料の外観

a　[品名] コダナシ　[標本番号] H22890
b　[品名] 仕事着　[標本番号] H23175
c　[品名] 木綿鉄砲袖接ぎ身頃継衣　[標本番号] H24618
d　[品名] ミジカハンテン　[標本番号] H16549
e　[品名] シバン　[標本番号] H17041

2-2c のように推定される。

さらにこの裁ち方で問題となるのは衿である。例1のコダナシでは衿丈中央に接ぎ線があり，衿幅は並幅の半幅で裁ち合せをすることができたが，この資料では衿に接ぎ線がないため，衿布をそのままの形で原布から裁断しなければならないはずである。そのため附図2-その2-2c のように衿布は布幅を三等分し，2着分の衿，掛け衿，襠をとる。したがって，袖と身頃の所要寸法は 207 cm×2 であり，2着分の所要寸法は 207 cm×4 となり，192 cm（衿と襠2着分）を加えれば総丈 1020 cm となる。これはすなわち1反に等しい寸法であるから，2着分を裁断することができるようにするため1着分に要する用布は，例1のコダナシと同様に，ほぼ半反分ということになろう。

背縫いは 1.5 cm の縫い代で黒木綿糸2本を使用して，約［8目/3 cm］の縫い目で二度縫いしてある。二度縫いの位置は耳から 0.5 cm はいった箇所である。

脇縫いは 4 cm の縫い代で，馬乗りを作るため，縫い代は馬乗り止りまで隠しじつけで折り開いてある。両身頃の脇縫い代は馬乗りの部分ともに耳ぐけがしてあり，耳ぐけの間隔は約 2 cm で概して丁寧である。

裾は 1 cm 幅の三つ折りぐけで，くけ目の間隔は約 1 から 1.2 cm でこれもまた概して丁寧になされている。

肩当ては袖付けの縫い目で折り付けてあり，肩当ての付け方としてはもっとも丁寧なやり方となっている。

衿は衿肩明きのところから裾まで前身頃の一部を包んでまとめているため，きわめてよく落着いている。衿付けの縫い目は［8目/3 cm］程度であろうか。衿ぐけは本ぐけで，折りきせは衿付け，衿先き，掛衿先きともに十分かけてある。掛け衿は地衿にくけ付けてあり，裏側は耳ぐけとなっている。

袖口は 0.7 cm 幅の三つ折りぐけで，くけ目は約 1 cm から 1.3 cm の間隔である。袖口明けにつけてある紐は附図2-その2-2d で分かるようにまつり付けである。

襠付けは 0.8 cm ほどの縫い代で縫い，縫い代は伏せ縫いしてある。袖底は袖口明けのため，附図2-その2-2d のように襠止りから袖口明けのところまで 0.5 cm ばかり斜めに折り出して伏せ縫いしてある。縫い代の端は耳と裁ち目になっているが双方とも耳ぐけにしている。

袖付けでは身頃を折り付けにしてあり，縫い目は約［10目/3 cm］の小さい縫い目である。折りきせは袖にかけ，約 1.2 cm の間隔で伏せ縫いがなされている。袖付け，襠付けの伏せ縫いの状況は附図2-その2-2e のようである。

例3　[品名] 木綿鉄砲袖接ぎ身頃継衣　[標本番号] H24618（衣類 F-3-7）

長崎県対馬で採集されたもので，採集記録によってハギトウジンと呼ばれたものであることがわかる。ハギトウジンの呼称については，ハギは継ぎ剝ぎのハギ，トウジンは筒袖の仕事着で，唐人屋敷などの唐人と解するものとむしろそれを誤りとする見方とがある [林　1960: 17; 柳田編　1939: 23]。

この資料につけられた上記の品名からもうかがえるように木綿で作られた鉄砲袖の着物で身頃は衣（布）を継ぎ接ぎにし，注目すべき資料である。

a　形　状

衽付きの長着形式で，袖口や裾の出袵の様子から衿仕立てにみえるが，裏をみると附図 3-その1-3b のように単仕立ての縫い代の始末をしていることがわかる。

この資料は身丈が 104 cm もあるので上半衣に含めることはできないが，構成要素単位ごとに表布と裏布の 2 枚の布を 1 枚合せにして仕立ててあるため，着方の点では単の長着的な着方となる。しかも全体が長着形式であるため衿は本衿で衿下があり，長い掛け衿がかけてある。なお袖には大小の襠が 2 枚ついている細袖（鉄砲袖）である。このような形状は，大裁女物長着に類似しているが，寸法的には身丈が短く身幅もせまい。それは小柄な人に合せた寸法か，両足を動きやすいように考慮しての寸法か分からない。なお，衿肩明きの寸法が小さく，衽下りもすくないのは衿元を合せやすくするための工夫だったのではないかとも思われる。各部分の寸法は別にあげたとおりである（表 1）。

b　材　料

表布は附図 3-その1-3a, 3b のように紺木綿と 8 種類の紺絣の木綿を巧妙に組み合せた44枚の小切によって構成されている。

また裏布は縦縞を下半身に，上半身には紺絣や格子の着古した布のなかから使えるものを選んだと思われる布が用いられている。この裏布に比して表布の小布はいずれも新しく，おそらく新品ではないかと推測される。

8 種類にもおよぶ絣や紺木綿の布を組み合せ44枚に配分した白と紺との配美色はまことに見事というしかない。

c　裁ち方と縫い方

この資料はこのように40枚以上の小布を接ぎ合せたものであるから，1 着分の裁ち方を推定するよりも，おのおのの用布ごとに小布の接ぎ方をみるほうがより大切であろう。ここでは附図 3-その2-3d によって表布と裏布のそれを推定してみた。

縫い方については主だった縫合部についてみるまえに，全体としての共通点を指摘

しておきたい。その第一は各小布の接ぎ合せを横方向の縫合線については上方に片返しにし，縦方向の縫合線は中央に片返ししているが，折りきせがほとんどないことである。その第二は身頃は左右両身頃をそれぞれ，衽は衽布全体，袖は各小布を単位として，表布と裏布を合せた周囲を白しつけ糸で 2 cm ほどの縫い目でまえもって縫い合せている点である。すなわち 2 枚縫い合せた小布を接ぎ合せて身頃，袖布にするのである。

背縫いは 2 cm の縫い代で，縫い目は［8 目/1 cm］程度で，縫い代の始末には伏せ縫いがしてある。伏せ縫いの場所は本縫いから 0.5 cm 離して 1 cm 間隔で縫ってある。折りは左身頃にかけてある。

脇縫いは縫い目の大きさ，縫い代の始末とも背縫いと同様である。一般に脇の縫い代は前身頃に折をかけ，後身頃の縫い代は折り開くが，この資料ではそのような方法がとられていないのが注目される。ただ表布と裏布とが合せられているものの，布の幅には差があるため，脇縫い代は不揃いではなはだ不規則である。

裾は，前後左右の身頃の裾ともそれぞれ 0.3 cm の出袱（でぶき）に作られている。袱（ふき）の崩れをふせぐためにしのびに似た押え縫いがしてある。その間隔は約 1 cm，位置は裾の折りきせ山から 0.5 cm のあたりである。

この資料では 2 枚合せた布に衿をつけるため，しかも布の容量も大きいので衿付けの縫い目はかなり大きく［5 ないし 6 目/3 cm］で，くけ目は本ぐけで衿付け縫い目と同程度である。掛け衿は衿先き近くまであり，その掛け方は身頃にくけ付けてある。掛け衿の裏は耳（みみ）で地衿にまつりつけている。衿先きに折りきせはみられない。

衽も身頃同様に 0.3 cm の出袱を作り，押え縫して袱を安定させ，衿下（えりした）は表裏毛抜き合せにして縫い合わされている。

衽付けは脇縫いと同じ方法で縫い，伏せ縫いによって始末している。

袖口は 0.2 cm の出袱。表布は濃紺の縁布で，袱は浅黄木綿であるから紺の濃淡による配色が落ちつきをあたえる。

袖の襠は大小の襠布を表裏ともそれぞれ白しつけ糸で縫い合せ，中心の細袖に縫い付けている。袖口の袱は出袱に仕立て，外見上は袷仕立てに見えるが，その他の部分は単仕立てにしてある。

袖付けの縫い代がかなりぶ厚く，袖に折りをかけた後，押え縫いをして落ちつけるようにしてある。

例 4　［品名］ミジカハンテン　［標本番号］H16549（衣類 F-5-10）

この資料は1934年アチック・ミューゼアム同人によって秋田県南秋田郡脇本村で採

集されたものである。

ミジカハンテンとは短い半纏という意味の呼称であろうか。半纏は羽織の代用として庶民に親しまれ，かつては，とくに女羽織の着用を禁じられていた女子にとって唯一の防寒着であり［西村　1978: 135–136］，各地の農村作業着中防寒着にこの呼称がのこされている[1]。なおそれらはほとんど綿入れあるいは袷で寒さよけを目的にしたものである。

このようにみてくると，夏季でも気軽に羽織れるものとして，冬季の防寒用の半纏より丈が短いこのようなミジカハンテンが作りだされたとも考えられるが，それは明らかではない。

a　形　状

形はハンテンの呼称が示すようにいわゆる半纏の形式（羽織に似ているが襠がなく，衿折りや前下りがない防寒着で一般に袷，綿入れ仕立て）に類似している。しかし衿は前身頃の前端を包んで裾までついていないかげえり（そらえり）で，脇の裾に馬乗りがついていることが，いわゆる半纏形式の衣服と異なる点である。なお胸紐がついていることは印半纏に似，袖は筒袖で振りがあり，脇には身八つ口がある。仕立ては単仕立てで，もともと女性用であったと思われる。各部分の寸法は別にあげたとおりである（表1）。

b　材　料

主な材料は身頃に紺麻の手織を用い，それに着古した木綿紺絣を袖に接ぎ合せて使用している。衿と紐とは同一の紺布。肩当てには手拭がつかわれている。

紺麻の糸密度は経［8本/1 cm］，緯［6本/1 cm］ほどで着古したものであるためか紺はかなり退色している。新品当初は白かあるいは浅黄程度の捺染柄であったであろうと推測される。

c．裁ち方と縫い方

単仕立てであるため表布の用布の裁ち方は附図4–4cのように推定される。

主材料は前後身頃2枚で，その他に袖は紺絣を5枚接ぎ合せたものを2枚，衿は紐とともに別の紺布の裁ち合せによって表布が構成されている。袖，身頃と，衿を3枚裁ちにすれば総用布丈は476 cmが必要で，この資料もまた半反でできあがることがわかる。しかし，この資料は袖，身頃，衿がそれぞれ別布であるため有り合せの布で

1) ハンテンの呼称は岩手，宮城，秋田，山形，福島，茨城，栃木，埼玉，千葉，東京，長野，兵庫，広島，高知，福岡，佐賀，長崎，宮崎の各都府県でつかわれている［鷹司 1961: 51］。この呼称は別の研究によれば愛知，静岡，長野，三重，滋賀，大阪の各府県で用いられていることが報告されている［高橋・後藤　1979: 索12］。

一着の農良着を作ったのであろう。

肩当てには手拭1枚をつかい，後身頃は長く前身頃には短く当てている。

背縫い，脇縫いとも縫い代1cmで，布幅いっぱいに縫いあげている。縫い目は[5から6目/3cm]ほどでいずれも折りをかけ，かくしじつけ風に縫い糸で押えてある。折りは背縫いは左身頃に，脇縫いは前身頃にかけてある。

身八つ口は4.5cmという短さであるが，脇縫いからつづく1cmの縫い代をつけて，始末してある。

裾は1cm幅の三つ折り縫いで，縫い目はやや大きく0.8cm程度である。馬乗りも同じ方法で裾の始末のあと馬乗りを縫っている。

衿下は耳(みみ)のままであるが，この部分のいたみは著しく当て布で補修がほどこされている。

肩当てはすでに述べたように手拭をそのままつかい，背縫いの位置を黒糸で2cm間隔で綴じ，布幅の両端は耳を耳ぐけしている。肩当ての裾は端を折り，そこで伏せ縫いして，それをさらに身頃に縫い付けている。

表衿は衿幅が5.5cmで，裏衿の衿幅が4.5cm。裏衿は1cmだけ表衿よりせまいため附図4-4bのように表衿を付けた様子が裏衿側からみえている。表衿は[6.5目/3cm]に縫いつけ，裏衿は折り伏せ縫いにしている。それは衿先きの場合も同じである。

紐は上前は衿裏に，下前は衿付け線から3cm前身頃のなかへはいり，肩山から23cm下ったところについている。

両袖とも5枚接ぎで，接ぎ目は割り，縫い代は伏せ縫いしてあり，接ぎ合せた後，1枚の袖布となるように縫製してある。袖口は1cmの三つ折りぐけであるが，接ぎ目のため多少落ちつきが悪い。なお，くけ目は約1.3cm間隔となっている。

袖底縫い目はほぼ[5ないし6目/3cm]で前袖に折りをかけ，縫い目から0.3cmほど離して伏せ縫いしてある。

袖付けは袖底と同じようにして始末し，振りは折り伏せ縫いがしてある。

この資料では以上の他，補綴が著しい。上前衿下についてはすでに述べたが肩部の破損もはなはだしく，手拭を丈長に用いて肩当てに用いているため肩の中央まで当らず，荷棒などでもっともよくいたむ箇所が肩当てからはずれるという結果になる。そのため右肩には二重の当て布がなされている。

例5　[品名] シバン　[標本番号] H17041（衣類 F-5-12）

採集地は鹿児島県大島郡十島村硫黄島であるという。シバンとはジバンの転化か，

シハンが変化したものかとも思われ，もしジバンであれば襦袢(じゅばん)にその原形を求めることもできよう。襦袢の着用地域はひろく，東北地方，関東地方各県，中部地方の一部におよび，シハンならその呼称は静岡県下にみいだされる［鷹司　1961：50］。

a　形　状

身頃の形状は例4のミジカハンテンに似てかげえりである。半纏と同じようにこの資料も上に羽織るもので，胸紐と脇紐がついている。袖は巻き袖で身八つ口，馬乗りがいずれもなく，袷仕立てで，身丈も長い。採集地からみて晩秋，初春の頃に男子が重ね着にするのではなかったかと思われる。各部分の寸法は別にあげたとおりである（表1）。

b　材　料

表布は縦縞木綿と紺木綿の組み合わせで，縞を上部に用いていることからそれが主材料と考えられる。縦縞はこげ茶 0.8 cm，薄茶 0.6 cm 幅で，紺木綿との配色には渋さが感じられる。裏布は表布の紺地のものと同じ布で，表裏とも新品かと思われる。用布はいずれも平織である。

c　裁ち方と縫い方

袷仕立てであるため表布と裏布との裁ち方は附図 5-5c のように推定される。

表布は袖と身頃からなり，総用布丈は 496 cm である。衿は1枚裁ちになっているが，3枚裁ちとすれば約 40 cm で足りるから，衿を含めた総用布丈は 536 cm となり，約半反で1枚ができあがることになる。ただしこの資料の場合には衿が1枚裁ちであるため，別の用布で1着分の衿と紐をとり，残りの布は他に利用したものと考えられる。

この資料は袷仕立てのため背縫い，脇縫いの縫い代の始末は明らかではないが，折りせきも適当にかかり，両部位とも四つ縫いである。

胴接ぎの表布の縞と紺の縫い合せは縞の側に折りをかけている。ただし接ぎ代の始末はみられない。

裾は羽織の裾が表布が裏へ引き返しになっているのと同じように引き返しで，ただ返り代はすくなく，表布の紺が 4 cm 裏へ引き返されている。裏布との接ぎ代で縫い代の始末はみられない。

衿下の始末は 4 cm 幅で表の紺布が裏に折りぐけとなっている。その際のくけ目は 0.5 cm ほどである。ただし衿先きではその幅は 3.5 cm とやや狭くなっている。これはこのように幅を狭くして衿に自然に折りこむためであろう。裾の引き返しとの交叉する部位は額縁ほど整ってはいないが，それに近い状態で始末している。

衿は表身頃からつけ，裏衿で本ぐけしている。ミジカハンテンのように衿幅の表・裏の差はなく，衿先きは 1 cm 折り，伏せ縫いしたままで，身頃にはつけていない。

紐は幅 1 cm のくけ紐で，長い紐を袖付け止りの位置にまつりつけ，短い紐を衿裏に千鳥がけで取りつけている。

袖は表裏ともに巻き袖で，表袖は内袖に，裏袖は外袖に接ぎ目がある。接ぎ目の縫い代は袖底に折ってあり，接ぎ目の始末はそのままである。

袖口には 1 cm 幅の縁布（袖べり）がつけられている。袖口はいたみやすいので縁布で包む方法は合理的な方法といえよう。袖付けは表裏とも袖側に折りをかけてある。

Ⅲ．ま　と　め

以上5例について標本資料の分析の結果を記してきたが，このうち例3の木綿鉄砲袖接ぎ身頃継ぎ衣については上半衣に準ずるものとみるべきものではないのでひとまずおき，残りの4例についての観察結果を要約することにする。

1.　まず材料としては藤布，麻布，木綿がみられる。ここにとりあげた4例では着用時期が明らかでないため，材料と着用年代，地域などの関係を解明することができないが，材料の色や柄は，もっとも新しいと思われる茶系統がはいった縞柄があった以外，すべて紺無地，紺と白との絣柄であった（農作業着が紺であったことは藍染の実用性と徳川幕府の法令「百姓法度」）による長期にわたる強制にもとづいていた)。

また資料に用いられている布類は，新品も含まれているが，再利用もしくは再々利用によるものであることが細部の分析によって明らかである。さらに表布は新品であっても，肩当てのように外見に支障がない箇所に古手の材料がつかわれていることも注目しなければならない。

2.　つぎに形状については，まず身頃（みごろ）は衽（おくみ）がなく，脇には馬乗りがついているものがある。肩幅と後幅との関係は後幅が29ないし 32 cm の範囲，肩幅が 30 ないし 32.5 cm の範囲となっている。このため袖付け線の傾斜はすくなく，ほとんど長方形をなしている。衿は本衿（ほんえり）とかげ衿の2種類があり，本衿の形式をとっている例1のコダナシ，例2の仕事着には前身を合せる結び紐はないが，かげ衿のものではいずれも胸紐ないしは脇紐で結ぶ仕組みとなっている。

袖は巻き袖（まそで），筒袖（つつそで），細袖（ほそそで）の3種類がみられ，ここにもまた農村仕事着の袖型の多様性がうかがえる。いうまでもなく手足は作業能率ともっとも深い関係をもち，その機能性こそ作業着の生命となる。したがって，ここにあげた資料の着用状況や作業実態

の詳細は明らかではないが，それでもなお作業態様に応じた工夫が作業着に加えられたさまがしのばれる。

なお仕立ては単と袷の2種である。

3.　寸法的にはここにあげる資料では，上半衣の長さは概して 70 cm 代から 80 cm 代に限られている。偶然の結果か女物と推測される例1（コダナシ）と例4（ミジカハンテン）は 70 cm 代，男物と思われる他の2例は 80 cm 代となっている。

身幅の値については後幅と肩幅との関係が同じ値ないし1または 1.5 cm の差となっていて，外形上長方形に近い形となる。

4.　資料の裁ち方から布の原形を推定してみると上半衣は半反，すなわち 500 cm 余りの用尺を用いていることがわかる。

上半衣を構成している主要な用布は前後左右の身頃と左右の両袖と衿とである。完全に半反（500 cm 余）で1着の上半衣を裁つとすると例1のコダナシのように衿の中央を継ぐ方法と，衿をつづけて裁つ1本裁ちの仕方，すなわち衿丈を布幅で三分して2着分の衿・掛衿を裁つ方法とがおこなわれている。

5.　縫い方については，単仕立ての標本資料3点についてはまとめることが難しいので，布の縫い合せ方からまとめることにしたい。

まず布の端の始末（袖口，衿下等）は耳のまま用いるか三つ折り縫いとしている。つぎに縫合部の縫い方（背縫い，脇縫い）は二度縫いもしくは2本糸で縫う。そこでは本縫いの後，伏せ縫いをするなどの技法が用いられ，耳ぐけ，折りぐけ等はすくない。縫い代の量は布幅いっぱいにとる傾向があり，丈・幅とも1ないし 2 cm の例が多くみられる。そこで縫い代の始末も丈夫さと簡易さを兼ねた伏せ縫いが多用されることになろう。

6.　仕立方には単，袷，綿入れなどの種類がある。そのうち単仕立てについては前項で述べたのでここでは袷について述べよう。袷は今回の報告では例5のみでもちろん一般的傾向を云々することはできないが，準上半衣とみなした木綿鉄砲袖接ぎ身頃継ぎ衣は袷であるから，ひとまずつぎのことが推測される。表布と裏布とを接合する方法としては四つ縫いをする場合と小布を接ぎ合せて仕立てる場合には各単位部分ごとに表裏をあわせて接ぎ合せ構成する方法とがある。ただし後者では裾，袖口のように表・裏布が外形線で縫い合される場所には従来の袷仕立て風の袱をつくる。

7.　その他縫製上見逃してならないことは，仕立てる人たちが，作業をする人たちがそれを着て作業した際どこに損傷が生ずるかを予知し，その手段を講じようとしていたことである。例えば例4のミジカハンテンの衿下，肩部の場合の処置のように。

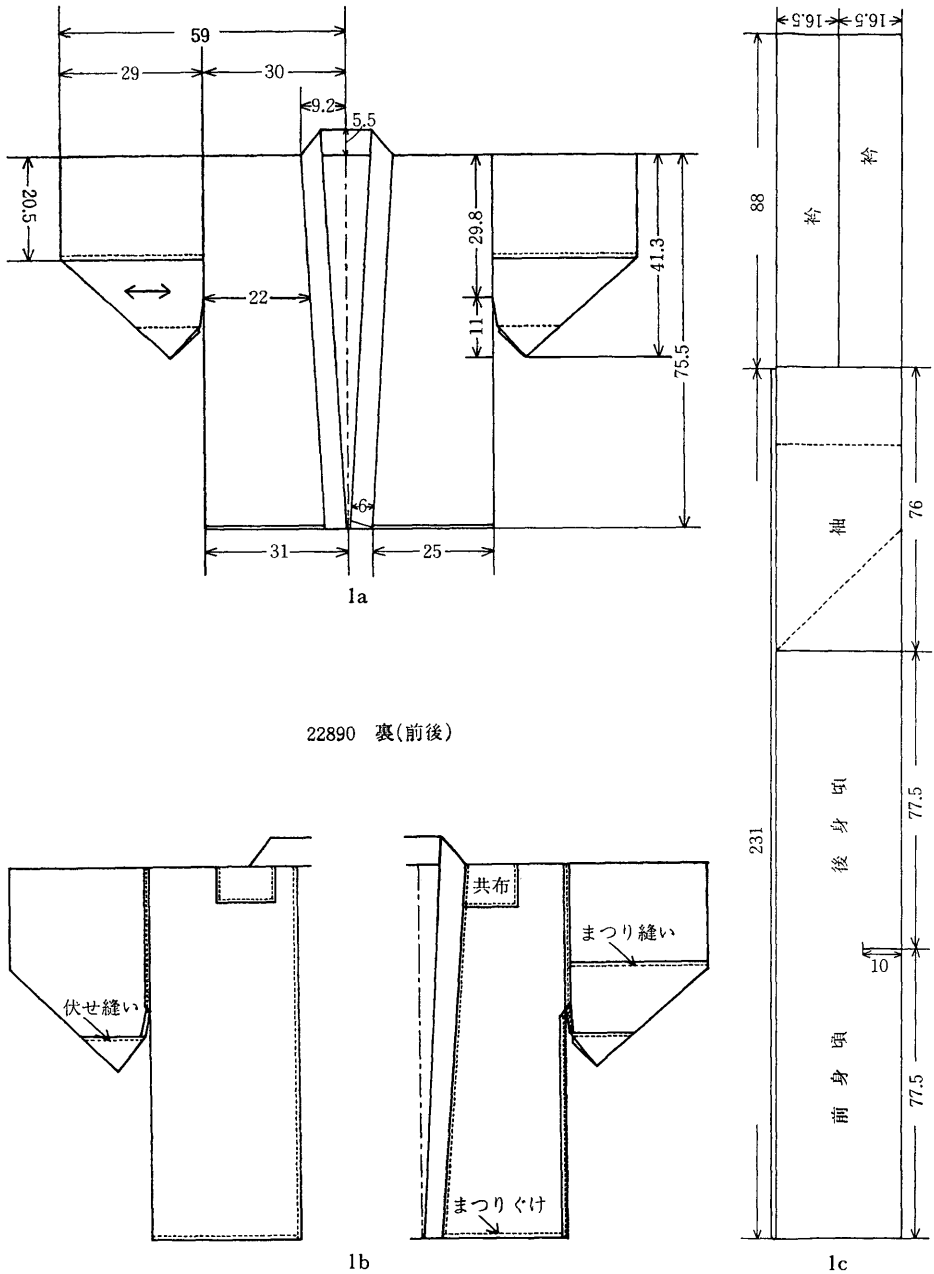
それにとどまらず農村作業着では農作業に適する特有の工夫がなされていたことが以上の各例からもうかがえる。このような工夫が，実は定形化した既存の長着類とのいちじるしい相違点となっていたのである。

謝　辞

この報告は第4研究部の中村教授を代表者とする国立民族学博物館の共同研究としての「非破壊分析をともなう労働衣服の比較研究」の一部である。写真撮影を担当された片山陽次郎，資料の計測と記録を分担した日浅治枝子，山崎光子，撮影，計測などに協力された奈良女子大学，岡山大学，県立新潟女子短期大学の学生諸氏に心からお礼を申しあげたいと思う。

文　　献

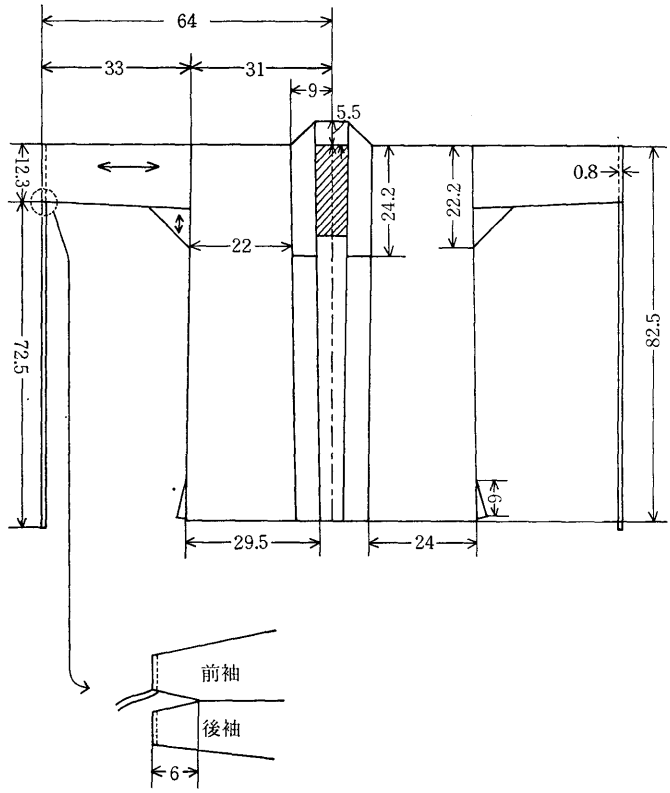
後藤守一
1943 『服装史概観』四海書房。
林　唯一
1960 『郷土の風俗』家の光協会。
日浅治枝子
1976 「農民被服〝のらぎ〟の性能について」『秋田県立農業短期大学研究報告』2。
西村綏子
1978 「江戸時代幕府法における衣服規制の具体的内容——着用する衣服を中心として」『岡山大学教育学部研究集録』49。
鷹司倫子
1961 「近世以降における農民服飾に関する研究——着装状況並びに名称よりみた労働着——」『大学紀要和洋女子大』7。
1973 「近世以降における農民服飾の研究——被服工作よりみた労働着——」『大学紀要和洋女子大』12。
高橋春子・後藤信子 編著
1979 『衣の民俗叢書労働着Ⅰ』明玄書房。
柳田国男 編
1975 『服装習俗語彙』(復刻版)　国書刊行会。



附図1　[品名] コダナシ　[標本番号] H22890

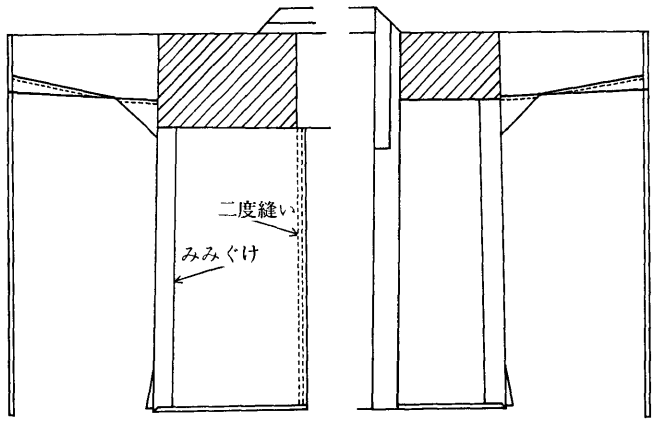
a　採寸図（採寸製図者　滝沢，中村。採寸年月日　1980年1月11日）
b　裏（左側は後，右側は前）
c　推定裁ち方図
（単位　cm）

附図2—その1



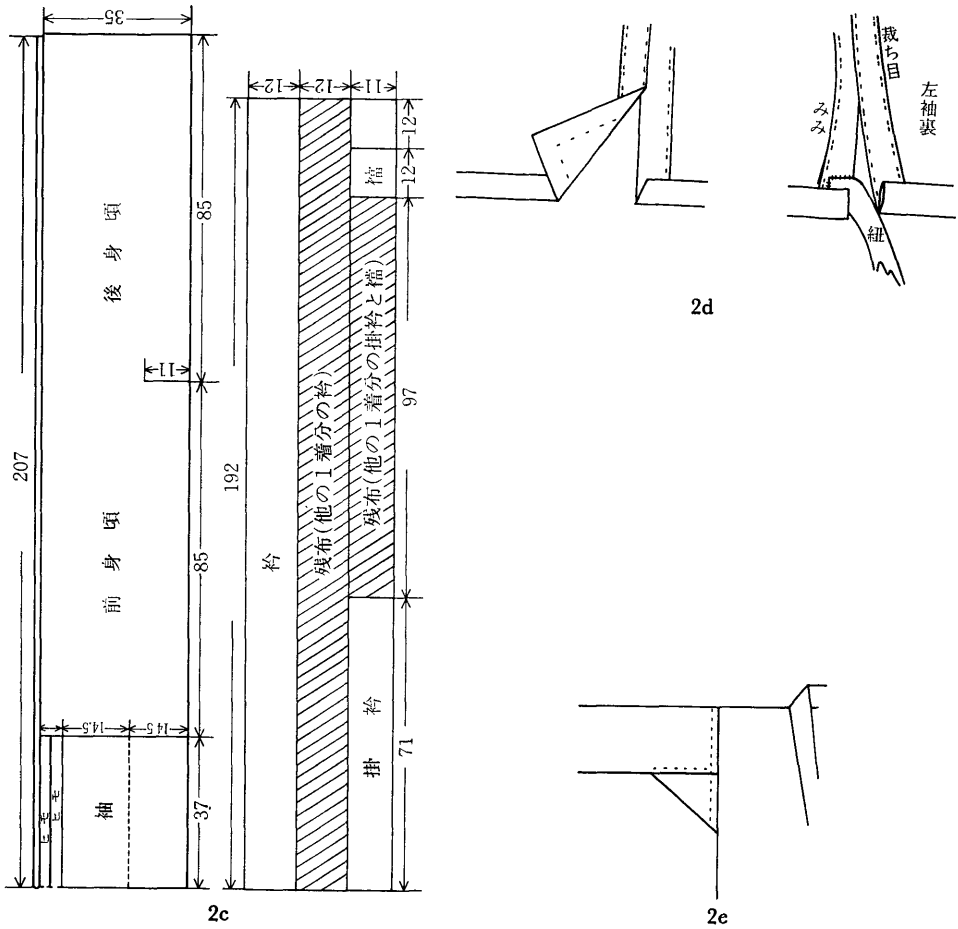
2a

23175　裏(前後)



2b

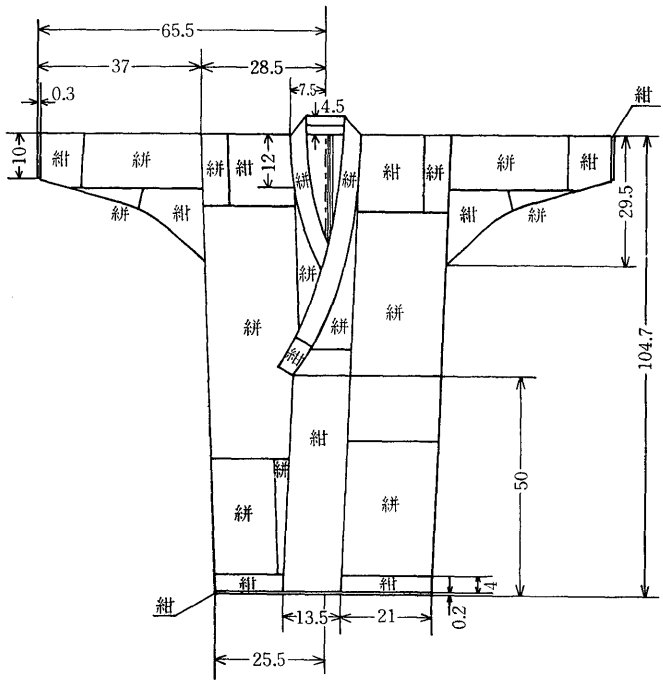
附図２―その２



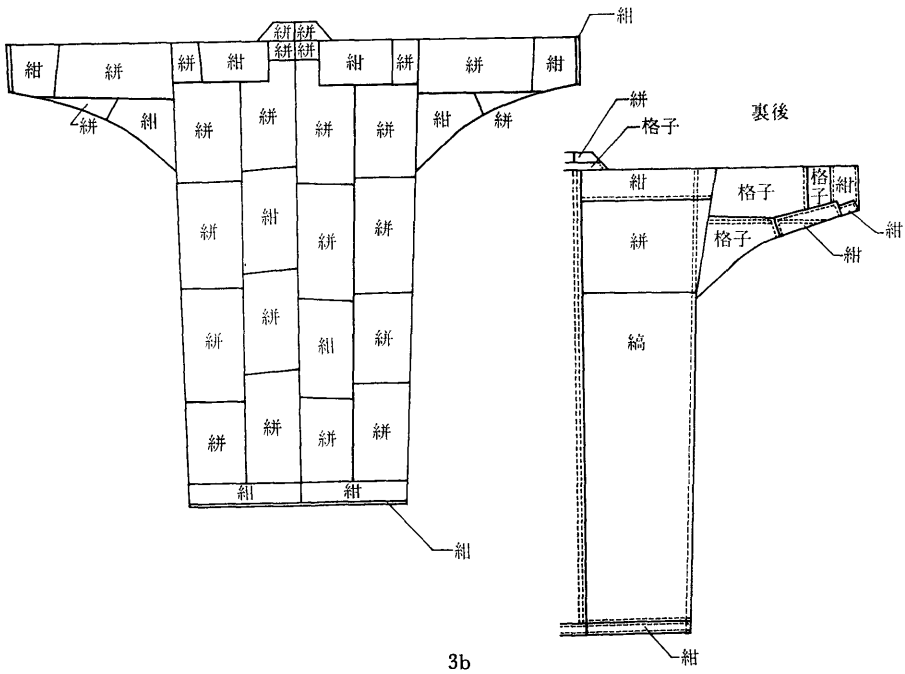
附図２　［品名］仕事着　［標本番号］H23175

a　採寸図（採寸製図者　滝沢，中村。採寸年月日　1980年１月11日）
b　裏（左側は後，右側前）
c　推定裁ち方図
　（単位　cm）
d　馬乗りの始末（左側）と袖口の紐付（右側）
e　袖付けと襠付けの伏せ縫い

附図3—その1

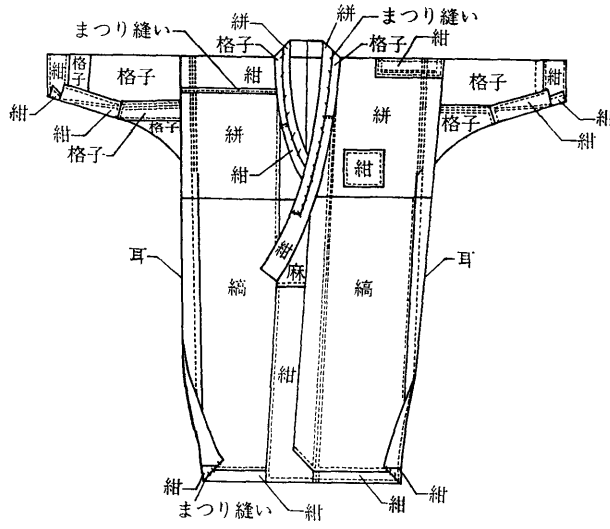


3a

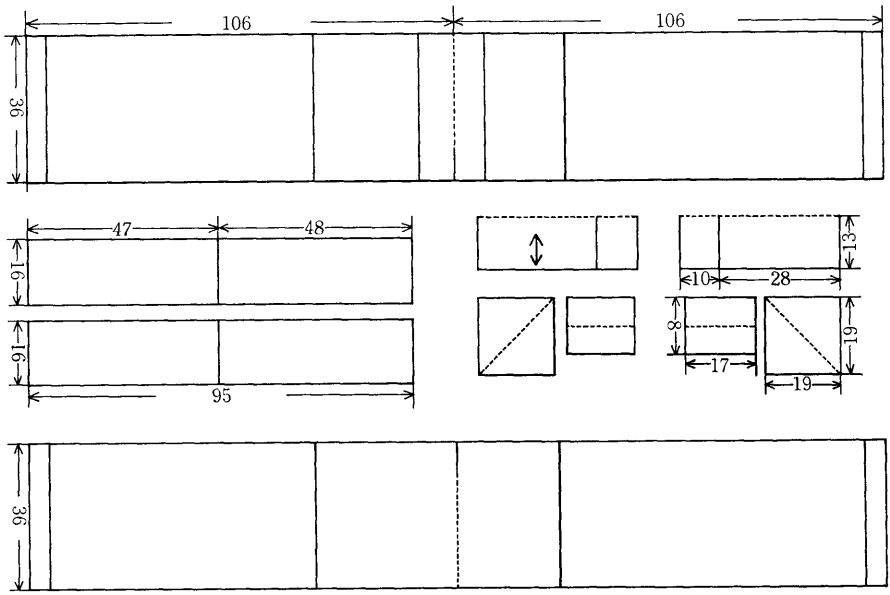


3b

附図3—その2


まつり縫い
絣
格子
紺
格子
紺
格子
紺
格子
紺
格子
紺
格子
紺
格子
紺
格子
紺
紺
紺

附図3—その3

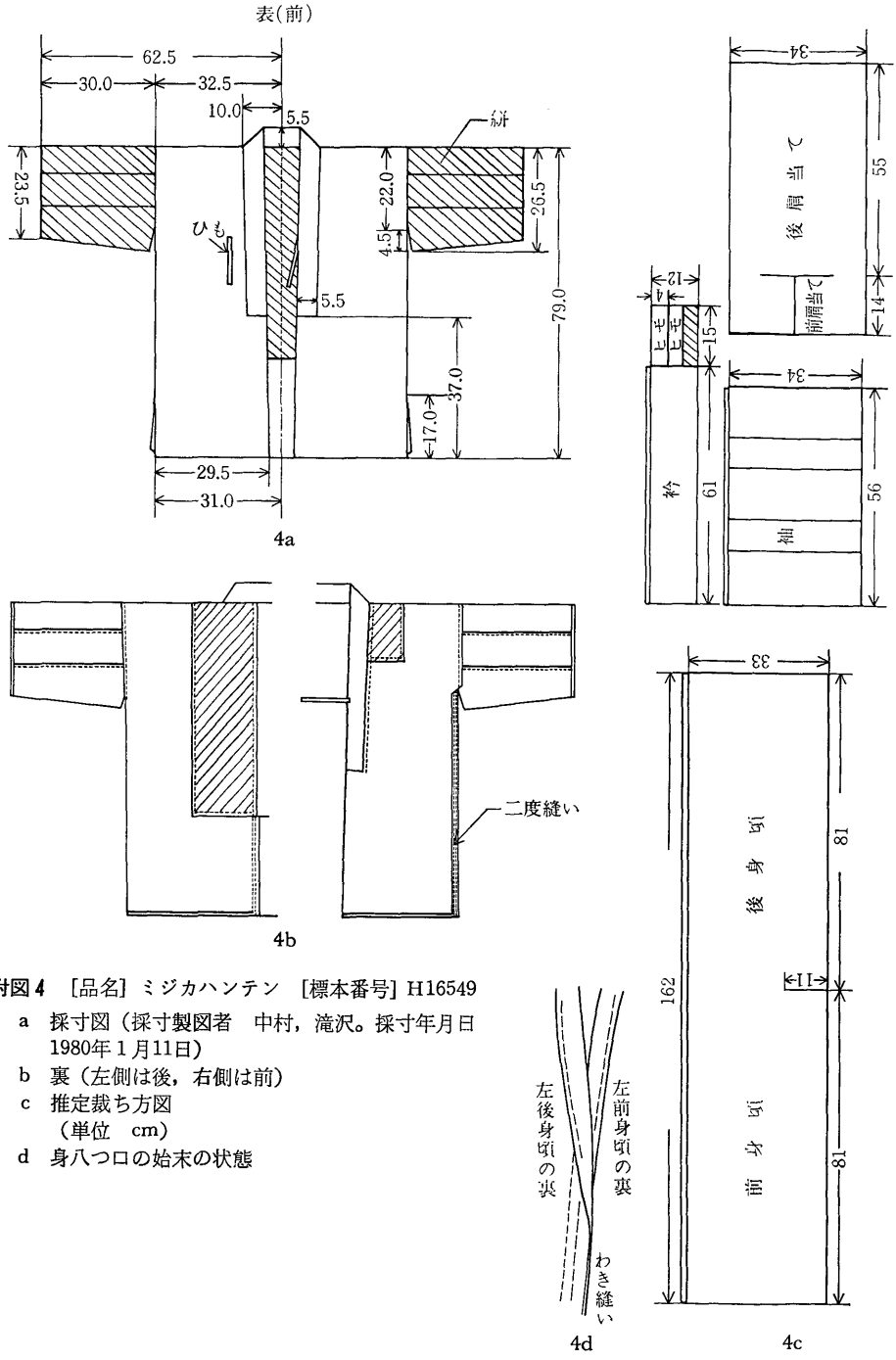


3e

附図3　[品名] 木綿鉄砲袖接ぎ身頃継衣　[標本番号] H24618

a　採寸図（採寸製図者　大倉，杉能。採寸年月日　1980年1月11日）
b　継布の構成（左側は表後面，右側は裏後面）
c　同表前面
d　表布の推定裁ち方図
e　裏布の推定裁ち方図
（単位　cm）

附図 4



附図 4　[品名] ミジカハンテン　[標本番号] H16549

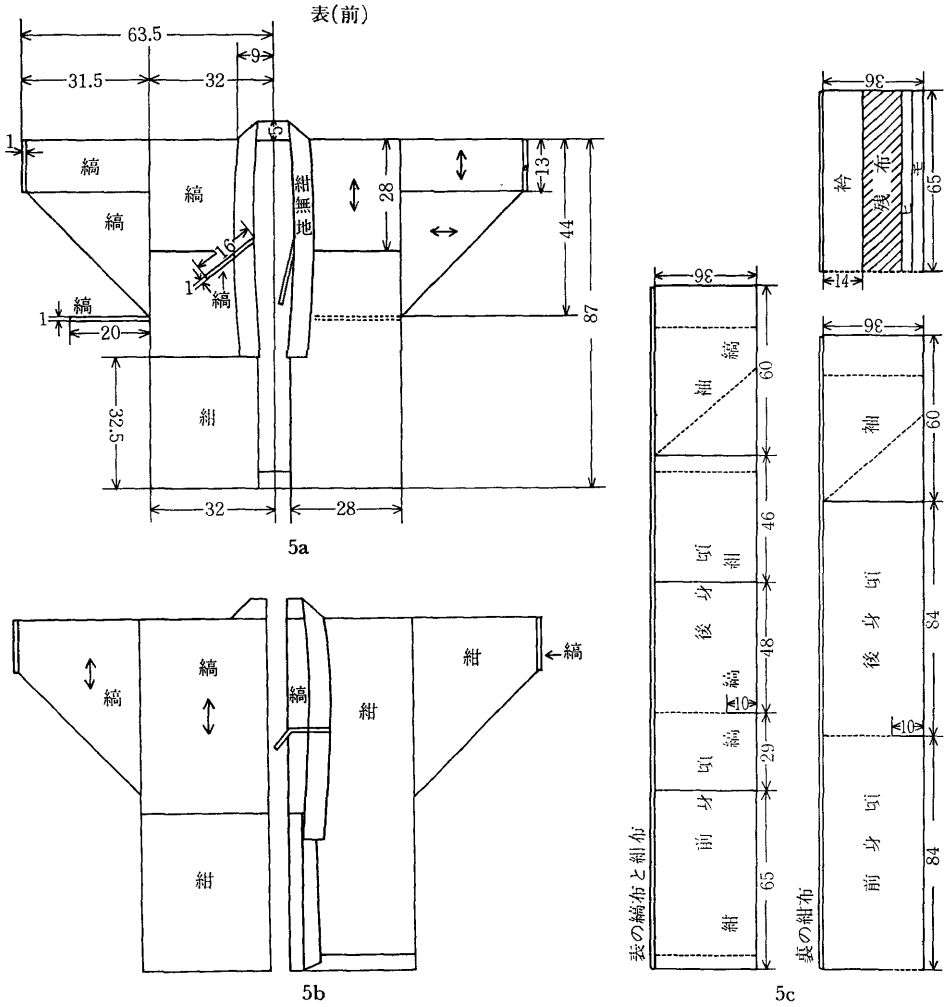
a　採寸図（採寸製図者　中村，滝沢。採寸年月日 1980年 1 月11日）

b　裏（左側は後，右側は前）

c　推定裁ち方図
（単位　cm）

d　身八つ口の始末の状態

附図5



附図5　[品名] シバン　[標本番号] H17041

a　採寸図（採寸製図者　大倉，杉能。採寸年月日　1980年1月11日）
b　表後面（左側）と裏前面（右側）
c　推定裁ち方図
（単位　cm）